

京都府埋蔵文化財情報

第105号

新発見が相次いだ亀岡市桂川左岸の遺跡

- 国営ほ場整備事業に伴う発掘調査から - ----- 小池 寛 --- 1

平成19年度発掘調査略報 ----- 11

6. 俵野廃寺第2次 7. 谷奥古墳群 8. 千束古墳群

9. 中山城跡第4次 10. 室橋遺跡第15次 11. 余部遺跡第8次

12. 長岡京跡右京第910次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

トピックス

千束5号墳出土の銅鏡、長岡京跡・友岡遺跡出土の石冠 ----- 23

普及啓発事業 ----- 25

府内遺跡紹介 111. 境野1号墳 ----- 28

長岡京跡調査だより・101 ----- 30

センターの動向 ----- 32

2008年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

新発見が相次いだ亀岡市桂川左岸の遺跡 - 国営ほ場整備事業に伴う発掘調査から -

小池 寛

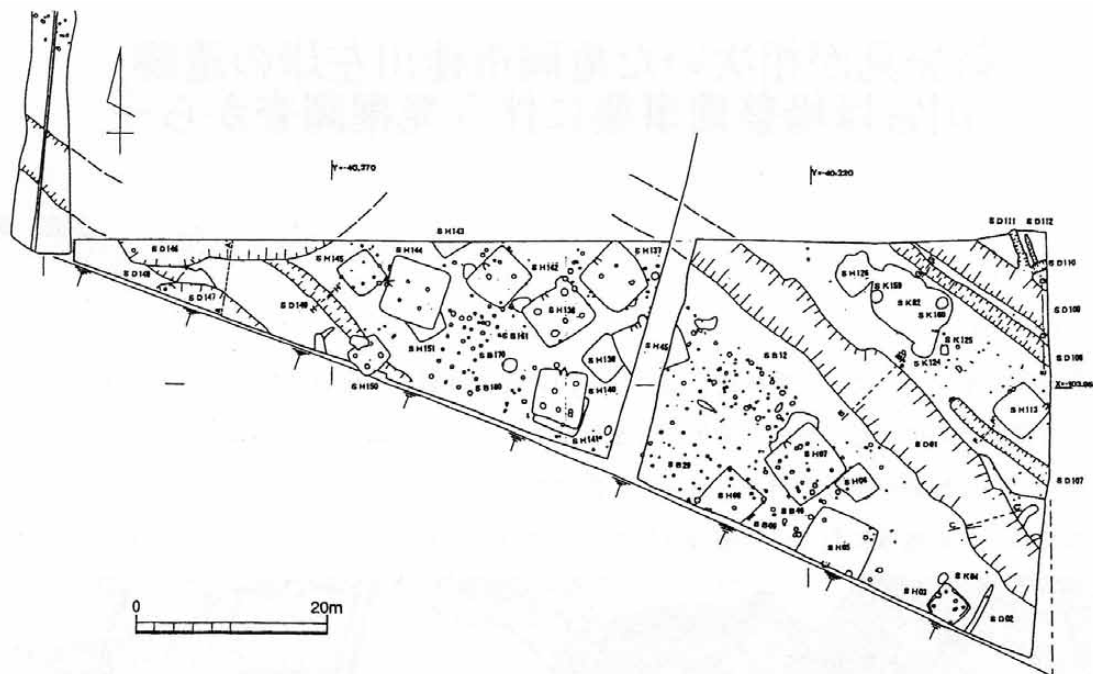
1. はじめに

当調査研究センターでは、農政局が施行する国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い平成14年度から亀岡市の桂川左岸地域で発掘調査を行ってきました。亀岡市域におけるそれまでの開発は、主に、右岸地域が中心であり、遺跡の発掘調査についても右岸地域に偏っていました。

そのため、左岸地域における発掘調査例といえば丹波国分寺・国分尼寺を中心とする一帯と池



第1図 亀岡市東岸地区北部の遺跡



第2図 池尻遺跡第12次調査で見つかった竪穴式住居跡や溝
尻廃寺周辺域が知られるだけで、どのような遺跡が広がっているかについては、ほとんどわかっていなかったのが現状です。

ここでは、新発見が相次いだ亀岡市の左岸地域での発掘調査成果を中心にどのようなことがわかり、その調査成果の意義についてふれていこうと思います。また、発掘調査で得られた調査成果について、担当者が何を考え、何を感じたのかについても述べていきたいと思っています。

2. 調査でわかったこと

第1図は、左岸地域でも北部一帯の遺跡と調査地を示した地図です。遺跡としては北から池尻遺跡、時塚遺跡、馬路遺跡、車塚遺跡などがあります。地図の中央やや左よりに池尻遺跡第12次G地区の調査地が図示してあります。その詳細図が第2図です。この調査区では、古墳時代中期から飛鳥時代の数多くの竪穴式住居跡を確認するとともに、住居跡と住居跡の間で掘立柱建物跡

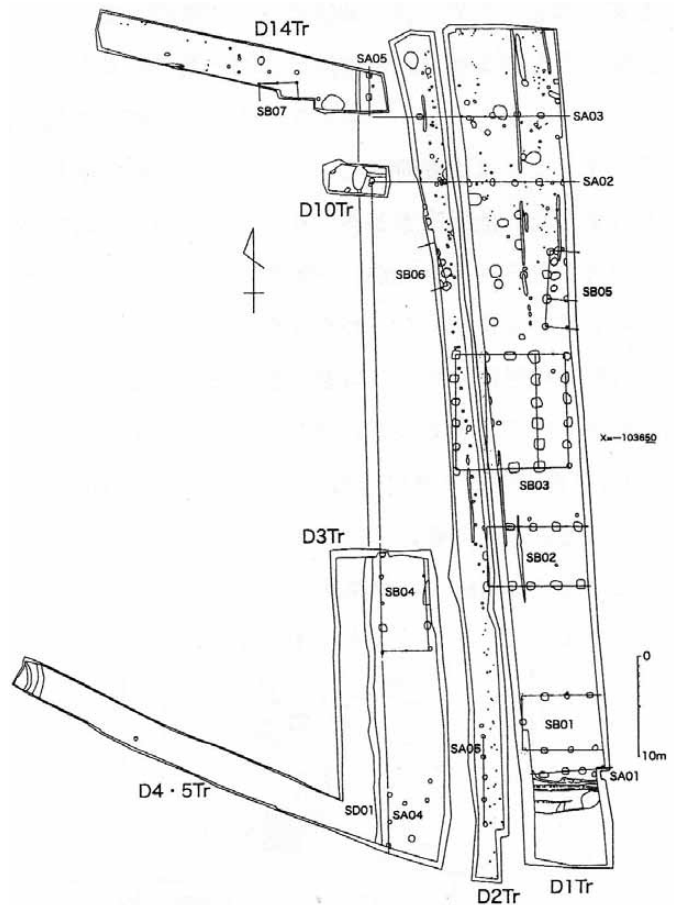


第3図 池尻遺跡から出土した子持ち勾玉

も確認することができました。また、竪穴式住居跡群の北東側では、幅6mの溝を確認しました。この溝の用途ははっきりとはわかりませんが、灌漑用水路ではないかと思われます。この溝は、第1図に示しましたように馬路遺跡の方向に延びていくと考えられます。この大溝の底から第3図にみられる滑石製の子持ち勾玉が出土しました。京都府内でも出土事例は少なく一

部欠損していますが、非常に丁寧に仕上げられています。古墳時代中期の集落内で何らかの宗教的な儀礼に使用されたと考えられます。調査を担当した岡崎専門調査員は、その美しさにしばらく言葉が出てこなかったと言います。しかし、岡崎さんはすぐに子持ち勾玉の出土地名表の作成に取りかかり、その重要性について再認識しました。一方、奈良時代の平行して掘られた溝107と108についても、道路ではないかと直感し、その後、日本考古学協会で旧山陰道の可能性を指摘する研究発表も行いました。(岡崎研一「池尻遺跡第12次の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報 第100号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006年)

また、池尻遺跡では、この調査に先立って第7次D地区において整然と計画的に配置された奈良時代の掘立柱建物跡群



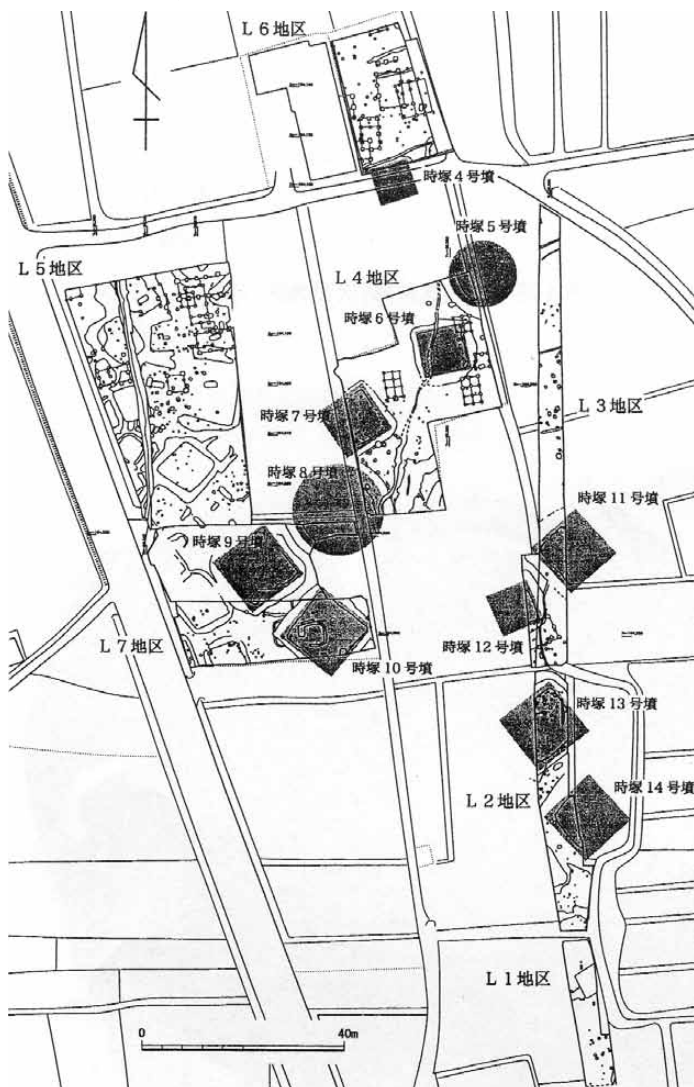
第4図 池尻遺跡第7次D地区の掘立柱建物跡



第5図 時塚1号墳盾持ち人形埴輪

や柵、溝などを第12次G地区の北方で確認しました。それが第4図です。ご覧のように柵と柵の距離や中心的な掘立柱建物跡S B03と柵の距離など、すべてが尺貫法を基準にして配置されていることがわかりました。調査を担当した石崎調査員は、文献を紐解き、丹波国府ではないかと推論しました。当調査研究センターの上田正昭理事長にも現地で指導して頂き、その可能性を示唆されました。池尻廃寺とあわせると一種の官庁街であったのかも知れません。現地説明会には多くの方が来られましたが、石崎さんは、ペーパークラフトで立体模型を作成し、参加された方々から大好評を得ました。わかりやすい説明会を心がけるきっかけにもなりました。その後、これらの掘立柱建物跡群は、当地の歴史を考える上で非常に重要であるとのことから、近畿農政局のご理解を得て、埋め戻され現状保存されました。(石崎善久「池尻遺跡第7次(D地区)の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報 第96号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005年)

次に池尻遺跡の東方に位置する時塚遺跡について述べることにしましょう。時塚遺跡は、段丘上に位置する遺跡で、遺跡地内から西方に広がる平野部を広く見渡すことができます。第1図に示したように、それまで知られていなかった一辺27mの方墳である時塚1号墳を確認しました。

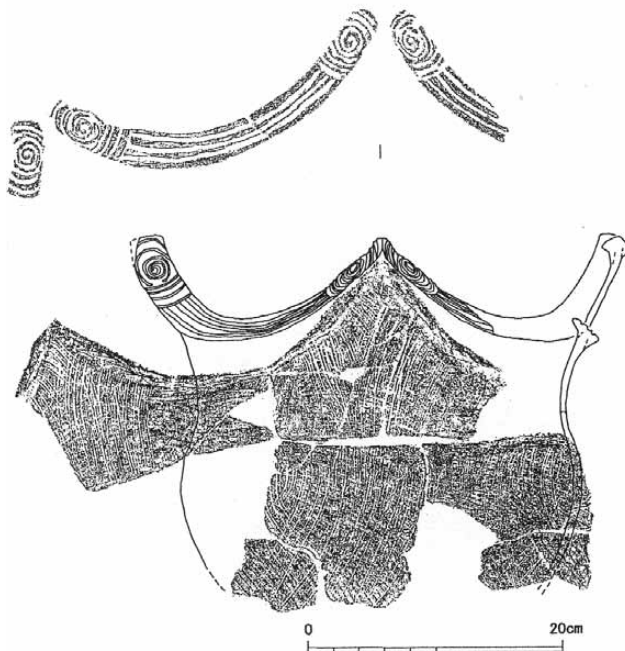


第6図 時塚遺跡第17次調査
方形周溝墓・古墳・掘立柱建物跡

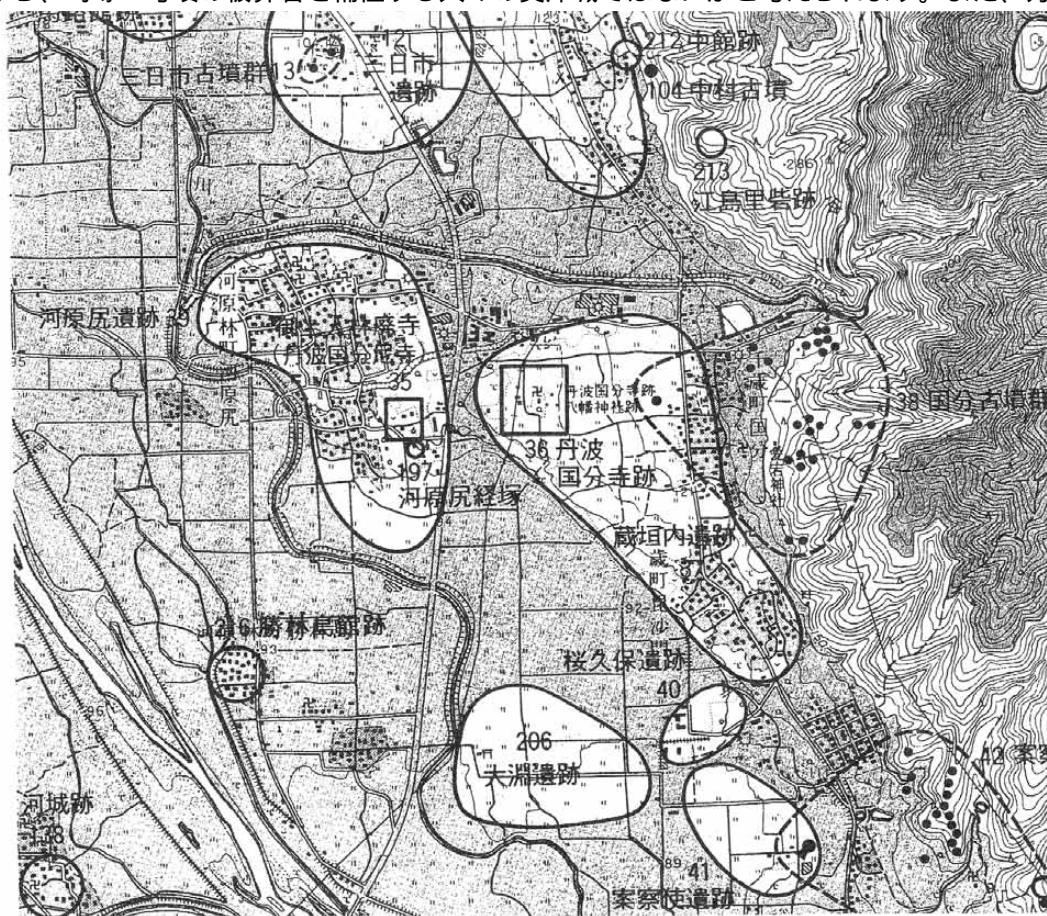
試掘調査を担当した京都府教育委員会の藤井主任は、その溝の大きさと直角に屈曲することから、方墳が有力者の居館ではないかと考えました。なぜなら、溝からは奈良時代の土器は出土しますが、古墳時代の遺物が全く出土しなかったからです。しかし、調査が周溝の東隅に及ぶと第5図に見られるような盾持ち人形埴輪等が出土し、方墳であることがようやく確定したのです。第5図の埴輪の顔面には、隈取りか入れ墨を表現した線刻が目の周辺に見られます。また、頭には複雑な切り込みがみられ、古墳に侵入する邪悪なものを睨みつける恐ろしさを秘めています。今のところ、池尻遺跡の北側に所在する坊主塚古墳に事例が認められるだけです。なお、この古墳が所在する地名は「時塚」ですが、もともと、埴輪や器を土器と総称することがあり、土器が散乱する塚であることが

ら「土器塚」といわれ、それが現地名の起源となったのではないかと考えられます。

また、時塚遺跡第17次調査では、第6図に見られますように弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代中期から後期にかけて築造された古墳群、そして、奈良時代の掘立柱建物跡を多数確認しました。今まで時塚遺跡で行った調査でも弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴住居跡を確認していることから、亀岡市域でも最も遺構が密集する弥生時代の遺跡であることがわかりました。先に述べましたように、非常に見晴らしがよく、高台に位置することから自然災害にあうこともほとんどなく、生活環境としては、非常に良かったのではないかと考えられます。一方、第6図中に円形や方形のスクリーンで表したのが、古墳群です。先に述べた時塚1号墳とは異なり、一辺が10m前後の規模であることから、時塚1号墳の被葬者を補佐する人々の奥津城ではないかと考えられます。また、方墳の



第7図 車塚遺跡の縄文土器



第8図 亀岡市左岸地区南部の遺跡 (新修亀岡市史資料編第1巻より)

中に円墳が混在して築造されていますが、方墳は、弥生時代の方形周溝墓の系譜を引くことから、在地の有力者達の奥津城ではないかと考えられる一方、円墳は、新しい勢力をもった人々が、その権力を誇示するように方墳群の中にあえて築造したか、あるいは、円墳が築造できるまでに成長したかが考えられます。いずれにしましても、今まで知られていなかった多くの古墳が、水田の下から新たに発見されたことに、体験発掘にきた亀岡高校の生徒たちを驚かせました。(岡崎研一「時塚遺跡第17次の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報 第104号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2007年)



第9図 三日市遺跡から出土した丹波国分寺創建瓦



第10図 新しく水田の下からみつかった国分古墳群

さて、時代は遡りますが、第7図の土器は、縄文時代後期の土器で、車塚遺跡から整理箱にして80箱弱出土しました。残念ながら、平安時代の整地層から出土しており、後世に移動させられたことがわかりましたが、車塚遺跡のどこかに、縄文時代後期の竪穴式住居跡が存在しているに違いありません。(稲畑航平「縄文土器」国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(4)車塚遺跡第7次『京都府遺跡調査概報 第123冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2007年)

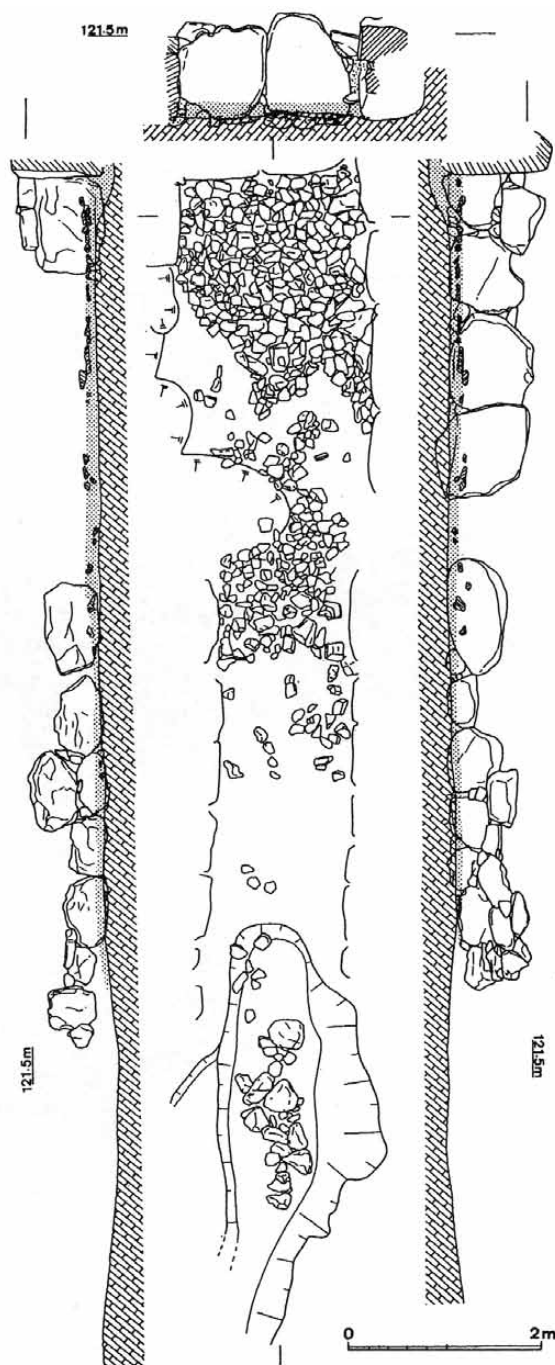
なお、文化人類学者のマードックは、1960年代にメラネシアやポリネシアで民族調査を行い、その当時の近代文明と関係を持たない部族の男女の生業比率を調査しました。その結果、大型土器以外の日常の土器は、80パーセントが女性の手によって作製されていることを突き止めました。縄文時代や弥生時代の土器の多くは、女性によって作製されたのではないのでしょうか。

さて、北部での最後に、三日市遺跡を取り上げます。三日市遺跡の発掘調査で

は、たくさんの瓦が出土しました。瓦を焼いた窯は見つかりませんでしたが、三日市遺跡の西側斜面を磁気探査しますと、被熱を受けている箇所があることがわかりました。おそらく、周辺に瓦を焼いた窯が存在することを示しているのだと思います。第9図は、三日市遺跡から出土した軒先を飾る軒丸瓦と軒平瓦です。文様を詳細に観察した亀岡市教育委員会の樋口参事と石崎調査員は、それが千歳町にあった丹波国分寺から出土する瓦の文様と全く同じであることを確認しました。このことから、丹波国分寺の瓦は、この三日市遺跡のどこかで焼かれたことがわかったのです。瓦が多く出土したのは、流路からであり、石崎調査員は、この水運を利用して国分寺に瓦を運んだと考えました。この発見も非常に重要であり、流路からの瓦は、痛まないように真砂土で被覆し、現地に保存されています。各国に所在する国分寺の瓦を焼いた窯が発見されることも非常に希であり、寺院建立の物資調達を考える上で重要な資料をえることができました。(石崎善久「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(3)三日市遺跡第3次『京都府遺跡調査概報 第114冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005年)

次に、亀岡市域左岸南部について見ていきたいと思ひます。南部には第8図にあるように丹波国分寺や国分尼寺、そして、それを広く囲むように蔵垣内遺跡があります。また、蔵垣内遺跡の北半には、国分古墳群が分布しています。一方、蔵垣内遺跡の西方には河原林遺跡、南方には保津車塚古墳や案察使遺跡が位置しています。南部もまた、北部と同じく遺跡が密集していますが、各遺跡の実態はほとんどわかっておらず、今回の発掘調査で、実に多くのことが把握できました。

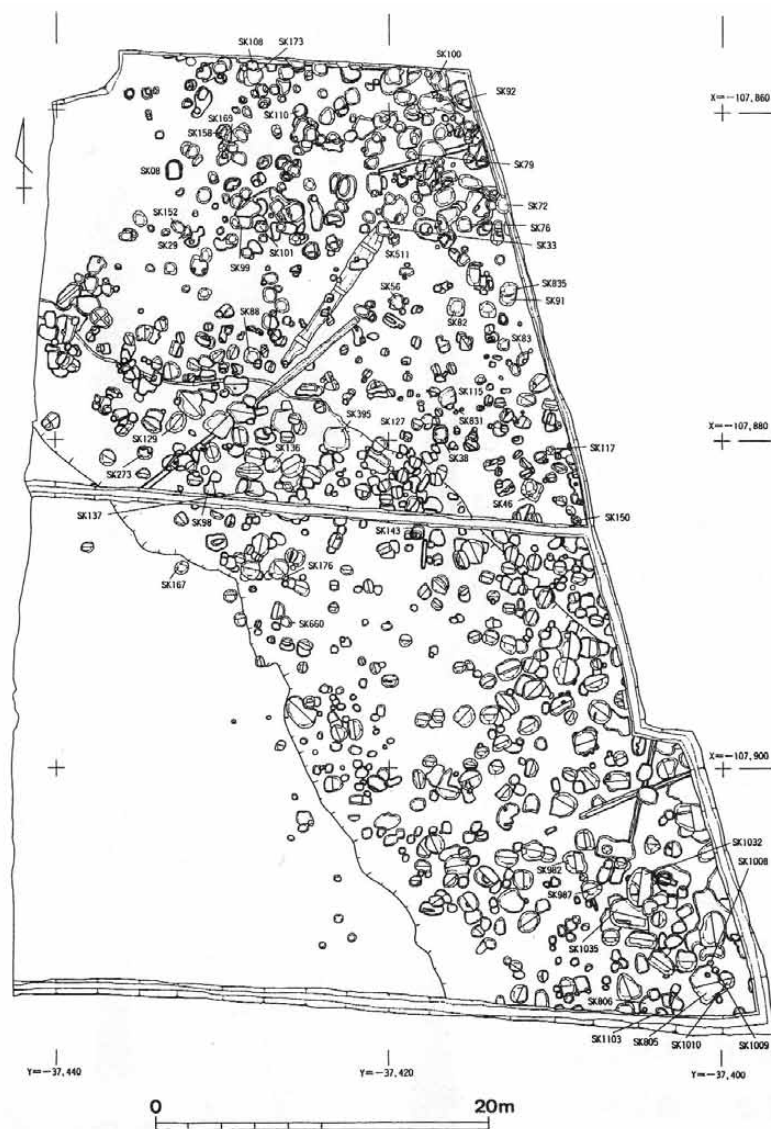
蔵垣内遺跡は、一連のほ場整備事業に伴う発掘調査の中で最も広い面積の調査を行いました。この調査で、弥生時代から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を多数確認するとともに、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴式住居跡も数多く確認しました。また、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡や溝なども確認し、鎌倉時代や室町時代の施設が存在したことがわかりまし



第11図 八角墳の可能性が高い145号墳横穴式石室

た。蔵垣内遺跡地内には、丹波国分寺が所在しており、寺院と関係のある諸施設が存在したことを想定していました。その結果、地形の傾斜とは関係なく、真北に主軸をもつ掘立柱建物跡群が多く見付き、当時の寺院周辺の様子が徐々に把握されてきました。そして、鎌倉時代から室町時代にかけての大規模な造成工事の跡や掘立柱建物跡、溝等が確認されました。出土遺物の中に中国製の青白磁などの香炉や茶臼などが出土したことに着目した森島主任は、丹波国分寺が徐々に寺域を縮小しながらも、周辺に子院を造営していったのではないかと考えました。

一方、蔵垣内遺跡の北方では、今まで、横穴式石室の石材が露呈していた国分1号墳が所在し、その東丘陵部を中心に古墳群が広がっていることがわかっていました。しかし、驚くべきことに、第10図にあるように水田の下から比較的残存状態の良い横穴式石室が27基以上確認され、古墳時代後期から飛鳥時代中葉にかけて築造されたことがわかりました。墳丘の形は方形、円形に分かれますが、特に、国分45号墳(旧登録番号S T 80)は、墳丘の周囲に配置された列石が直線的に屈曲することが判明しました。調査を担当した筒井調査員は、正確な現地検証と実測図での確認を

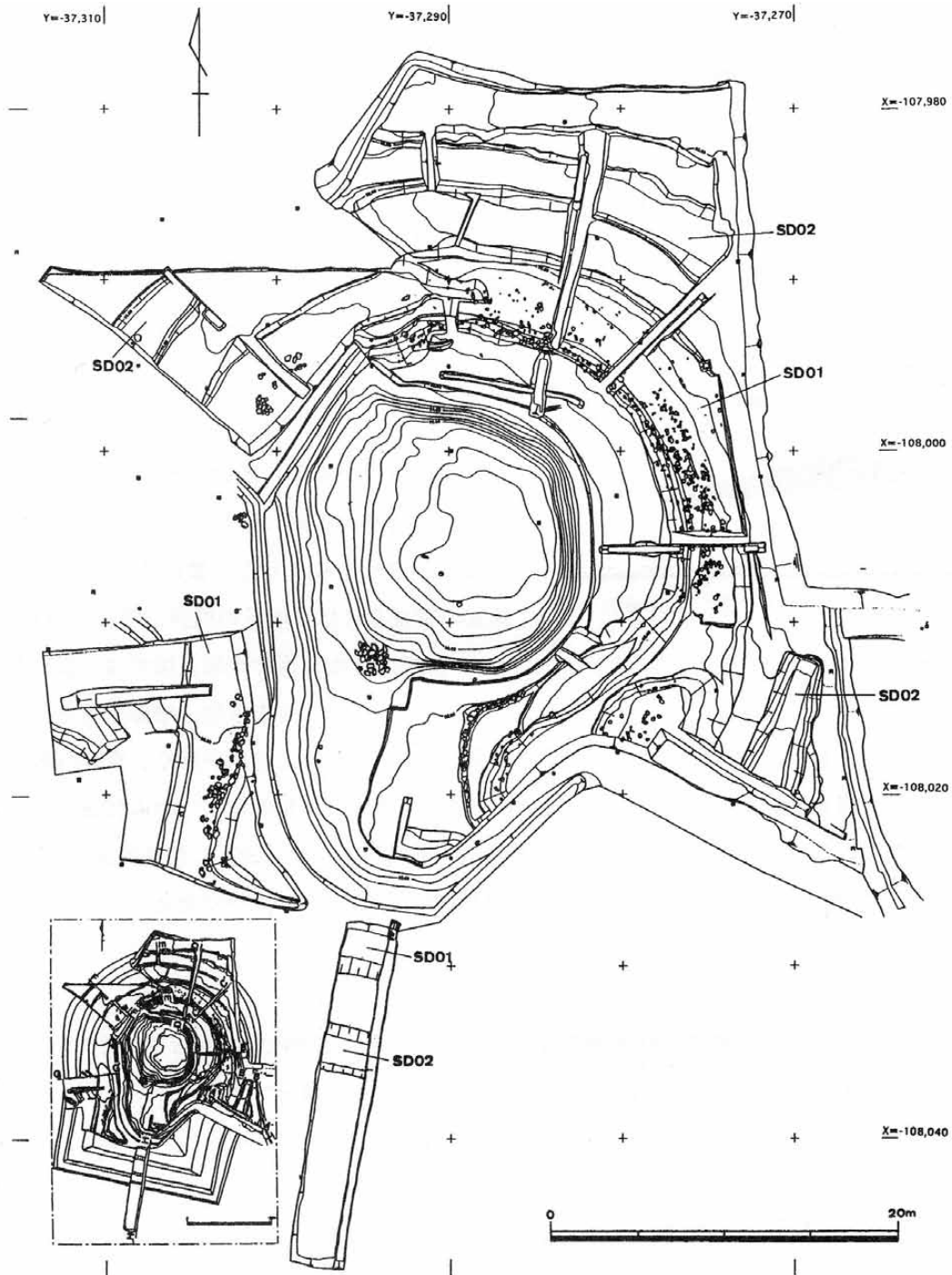


第12図 案察使遺跡でみつかった多数の穴

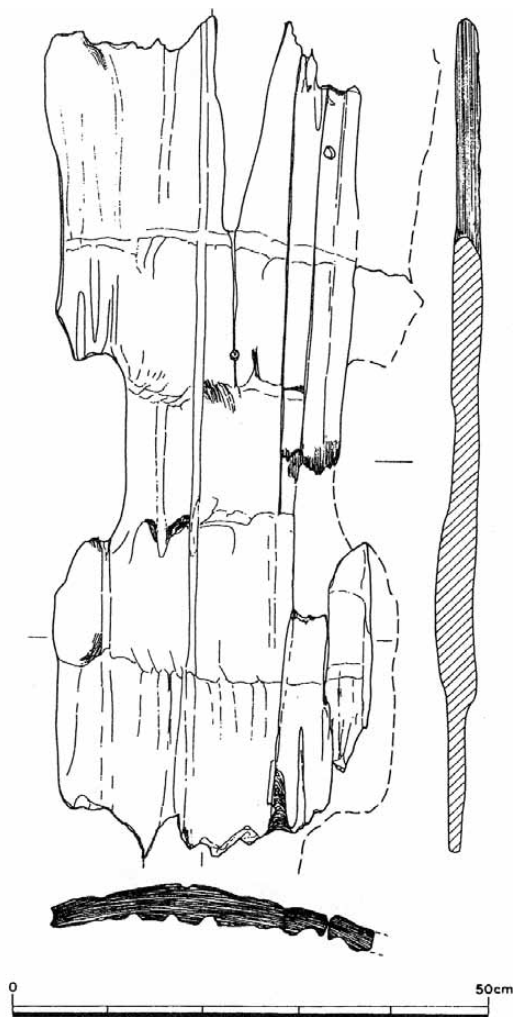
繰り返すとともに、関係資料を集成した後に、八角形ないしは六角形である可能性を指摘しました。一方、この古墳の横穴式石室は、第11図にあるように国分古墳群で確認された横穴式石室のなかで最も大きい石室です。築造時期は7世紀中葉であり、他の古墳とは使用する石材の大きさや石材の積み方も異なっています。また、多くの副葬品とともに銀装の太刀が出土しました。これらのことから、国分45号墳は、国分古墳群の中であって盟主墳であったと考えられます。一般的に、八角形墳や六角形墳は、天皇陵に一番多く、また、官人層の墓にのみ採用できた墳形であると考えられています。今回、確認できた国

分45号墳は、単独で築造された多角形墳のように派遣された官人の墓ではなく、群集墳の中に築造されていることから、当地から中央に出向き、中央との強いパイプをもった有力者の墓であったと考えられます。また、丹波国分寺が当地に建立される背景として、中央との関係をもった人物が何らかの影響を持ったと考えることは、さほど無理がない解釈であるのかも知れません。(筒井崇史「葦垣内遺跡第4次・国分古墳群の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報 第102号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2007年)

案察使遺跡では、第12図にあるように1100基あまりの弥生時代後期の穴が確認できました。こ



第13図 保津車塚古墳の空中写真測量図



第14図 保津車塚古墳の木製埴輪

人頭大から拳大の葺石を貼り、周濠をもつことが一般的ですが、保津車塚古墳では、葺石と周濠はあるのですが、埴輪が出土していません。しかし、第14図のような木製の埴輪を樹立していることがわかりました。調査を担当した戸原主任調査員は、木製品に造詣が深く、樹種の鑑定や表面に残る加工痕などを丁寧に図示し、基礎資料を作成しました。亀岡盆地での木製埴輪として全国的に有名になりました。(戸原和人「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(保津車塚古墳第2次)『京都府遺跡調査概報 第103冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002年)

3. まとめ

以上のように、左岸地域での発掘調査は、今までの歴史を覆す内容をもっています。今後は、遺跡ごとの事実関係を基礎に府民市民のみなさまへどのように還元できるのかを考える段階に入ったといえます。今回は、成果の概略を記述したに過ぎませんので、関係機関と協議して、展览会や講演会などを通じて、郷土に遺跡の重要性をアピールしていきたいと思っております。調査をすすめるにあたり、ご協力いただいた関係機関にお礼を申し上げますとともに、調査にご参加いただいたみなさまに、御礼を申し上げます。

これらの穴は、密集する傾向があり、民衆の墓なのか粘土を採取した穴なのかの議論があります。この遺跡を調査した福島調査員は、基本的には粘土などを採掘した跡だと考えましたが、その内のいくつかは、土器を棺として埋葬する土器棺墓である可能性も示唆しています。当時、竪穴住居跡や土器を作る際に多量の粘土が必要であったと考えられますが、良質な粘土を採掘するならば、連続して掘り込んだ方が省力化できると考えることもでき、今後、用途については今一度考える必要がありそうです。(福島孝行「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(1)案察使遺跡第4次『京都府遺跡調査概報 第108冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年)

最後に、第13図の保津車塚古墳を取り上げます。保津車塚古墳は、円墳状の墳丘が水田に残存していて、古くから古墳であることが知られていました。発掘調査の結果、既に失われた前方部が検出され、古墳時代中期の全長52.7mの前方後円墳であることがわかりました。畿内政権と関係の深い地域の首長墓には、墳丘の周囲に埴輪を樹立させ、

6. 俵野廃寺第2次

所在地 京都府京丹後市網野町俵野

調査期間 平成19年10月17日～平成20年2月8日

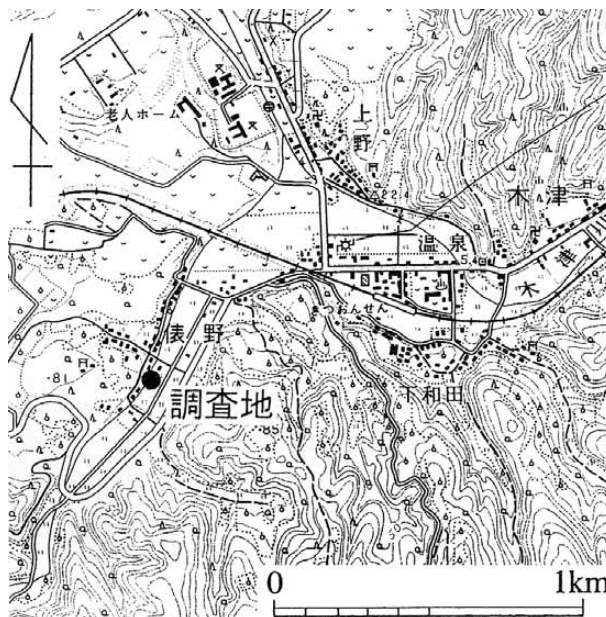
調査面積 600m²

はじめに 今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、俵野川改修工事に先立ち発掘調査を実施した。調査は、平成18年度に実施した試掘調査における成果から、遺物の出土が多かった地点を中心に今年度の調査地区を2か所に設定した。

遺物の発見は、大正11年の河川工事の際に塔の心礎と思われる礎石や複弁蓮華文軒丸瓦などが採取されている。また、昭和14年には鬼瓦などが採取されている。

調査の概要 調査は、昨年度の試掘調査を受けて、調査対象地内に2か所の調査区を設定し南側をA地区、北側をB地区とし調査を実施した。瓦などが出土する面の直上までを重機で掘削し、以後は人力による掘削を実施した。

A地区では、北側部分で南北の長さ約40mにわたる広範囲で、多くの瓦が堆積する層(以後、瓦堆積層)を確認した。また、A地区の南側では、5～10cmほどの大きさの石が広い範囲で敷かれたような状況がうかがえる礫の集中した部分を確認した。礫敷きには瓦が混入しており、寺に関連する遺構と考えられる。出土遺物は、瓦では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土した。そのなかでも軒丸瓦では、これまで発見されている複弁蓮華文軒丸瓦(軒丸瓦1)のほ



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000 久美浜)



第2図 B地区瓦堆積全景(南西から)

かに、これまで叡野廃寺では出土していない軒丸瓦が出土した(軒丸瓦2)。

B地区では、調査地の西側において、広範囲におよぶ多量の瓦や木材が堆積する瓦堆積を確認した。東側半分では南北方向に並ぶ杭列、北側では東西方向の杭列を検出した。出土遺物は、瓦では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土した。瓦類のほかには、奈良時代に属する須恵器杯、杯蓋や、平安時代(10世紀代)の須恵器杯、土師器杯などが出土した。

まとめ 今回の調査では、A・B地区の2か所において、多量の瓦が幾重にも重なった瓦堆積を広範囲で確認した。A地区では、南北の長さが約40mを測る広範囲で瓦堆積を確認した。そして、この瓦堆積には、平安時代の遺物が含まれていることから、この時期に建物の解体あるいは倒壊後の片付けがあったと考えられる。B地区の瓦堆積は、西から東に向かって傾斜していることが断面の観察によって確認でき

た。杭列は、東側と北側で検出した。この杭列には横板が残る部分があり、おそらく西側斜面の土の流出を防ぐために設けられた土留めがなされていたと考えられる。

そして、この2か所の瓦堆積には、平安時代の遺物が含まれていることから、この時期に建物の解体あるいは倒壊後の片付けがあったと考えられる。

出土した瓦には、これまで発見されている複弁蓮華文軒丸瓦(軒丸瓦1)のほかに、これまでにみつかっていない花弁が7枚の軒丸瓦(軒丸瓦2)が出土した。この軒丸瓦は、A地区でのみで出土しており、別の建物に葺かれていた可能性も考えられる。A地区の南側は、礫が敷かれた広場のような空間が存在していた可能性がある。

今回の調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかった。しかしながら、従来から知られる塔以外に建物が存在していた可能性が高くなった。

(村田和弘)



第3図 出土軒丸瓦1



第4図 出土軒丸瓦2

7. 谷奥古墳群

所在地 京丹後市弥栄町木橋・鳥取

調査期間 平成19年6月18日～11月29日

調査面積 3,085m² (古墳11基)

はじめに 谷奥古墳群の調査は平成18年度から実施しており、昨年度は試掘調査を行い、新たに見つかった古墳のうち、5～7号墳の3基の発掘調査を行った。今年度は、昨年度に見つかった2～4号墳、8～12号墳の発掘調査を実施し、あわせて12号墳から南東方向に延びる尾根上の試掘調査を行い、新たに見つけた13～15号墳の調査を行った。この調査は、府道網野岩滝線幹線道路改良事業に伴うもので、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

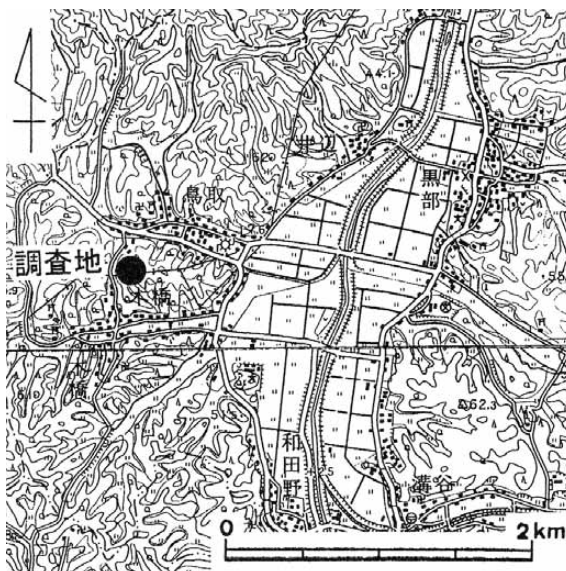
調査概要 調査の結果、谷奥古墳群の古墳は北近畿地方に通有に見られる「階段状古墳」、「座布団古墳」であり、丘陵尾根を削り出して低い側に若干の盛土を行い、平坦面を造り出して、1～2基の埋葬施設を設置するものである。特徴的な古墳には、2・8・10号墳がある。

2号墳は丘陵の最高所に位置した古墳で、地山を削り出して長径38m、短径24mの不整形な長楕円形に整形している。この上に、1～3基の埋葬主体が5群に分かれて分布しており、いわゆる共同墓地的な在り方をなしている。

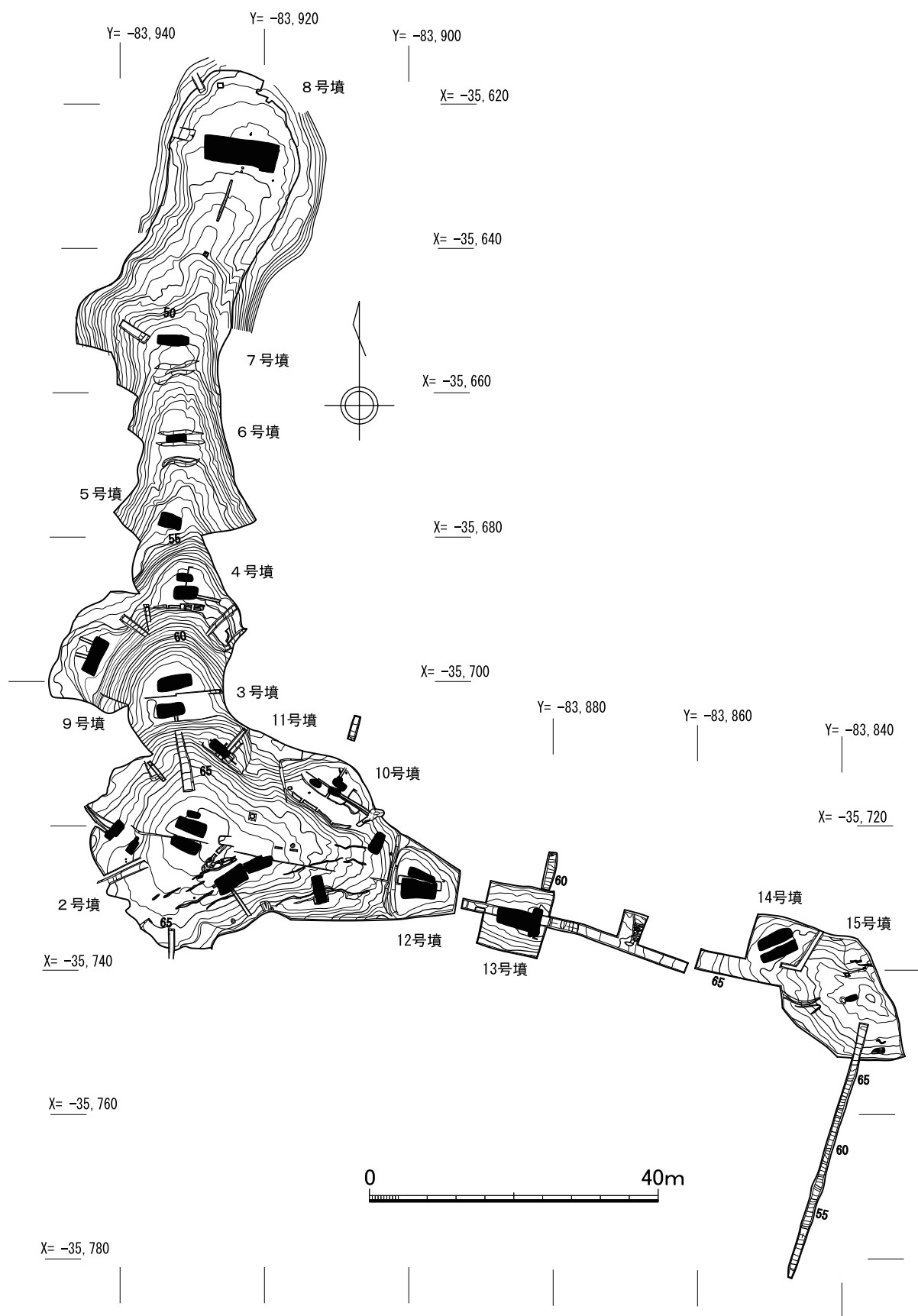
8号墳は丘陵先端部に造られた直径20mを測る古墳で、10.5×4.2mの墓壇内に、長さ8.2m、幅0.75mの割竹形木棺が据えられていた。この古墳の墓壇・木棺規模は、王墓クラスに比定できるものであるが、副葬品として鉄剣と鉄鏃が出土しただけである。10号墳は2号墳の北東斜面に造られた古墳で、木棺2基、土器棺1基、土壇1基を検出した。これらの木棺・土壇の規模から、小児ばかりが葬られた古墳と推定される。

まとめ 谷奥古墳群の築造時期は、10号墳の土器棺や8号墳の家形埴輪、13号墳の土師器等の年代観より、4世紀前葉～5世紀前葉にかけて築造されたものと判断され、周辺ではやや遅れてニゴレ古墳が造られている。盛土をほとんど行わず、副葬品も少なく、いわゆる在り地の古墳と判断できるものである。当古墳群の被葬者像は、網野町銚子山古墳、丹後町神明山古墳、弥栄町黒部銚子山古墳などの大型前方後円墳に葬られた丹後地域の王を支えた、小地域の首長層が想定される。

(岩松 保)



第1図 調査地位置図
(国土地理院1/50,000 網野・宮津)



第2図 谷奥古墳群古墳配置図（黒塗りは主体部）

8. 千束古墳群

所在地 京丹後市峰山町石丸小字千束谷

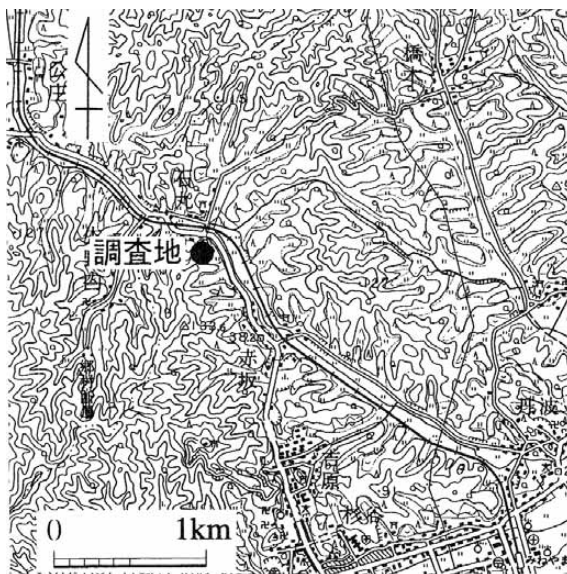
調査期間 平成19年8月21日～12月6日

調査面積 380m²

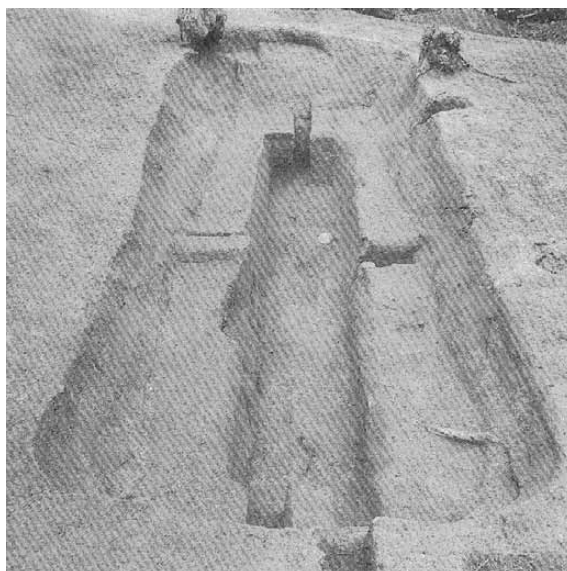
はじめに 千束古墳群は、峰山町北西部の谷筋に位置しており、南側の山地から北側に延びる小尾根の先端部に立地する。今回は、府道網野峰山線道路改良工事に伴い、5・6号墳の発掘調査および周辺の試掘調査を実施した。

調査概要 5号墳は、径約13mの半円形状に尾根筋を整形した小規模な古墳である。墳頂部に5.2m×2.1mの埋葬施設を設け、箱形木棺を埋納する。埋葬施設の主軸は北西から南東方向であり、遺体の頭位は北西側とみられる。推定頭部位置の東側から銅鏡(仿製斜縁四神二獣鏡)、翡翠製勾玉や管玉、白玉などが出土した。西側からも勾玉や管玉、白玉、ガラス小玉が出土した。この古墳は5世紀前半頃の築造と考えられる。6号墳は、5号墳の東側下方に位置する。一辺約12mの方形墳である。墳頂部に5.3m×2.3mの埋葬施設を設け、箱形木棺を埋納する。埋葬施設の主軸はほぼ南北方向である。棺底南北両端部に須恵器蓋杯が枕状に置かれており、その状況から、2遺体を埋葬した可能性が高い。この古墳からは、須恵器や鉄製品のほかに、棺内北側から銅釦が出土した。築造時期は6世紀前半頃と考えられる。

まとめ 今回の調査では、古墳時代中期と後期の2基の古墳を検出した。中期の5号墳は、尾根筋を平坦に整形した小規模な古墳であるが、銅鏡や多数の玉類を副葬する。このような事例は少なく、どのような被葬者であったのか注目される。あるいは、当時の丹後の豊かさの一端を表すものか。後期の6号墳では、銅釦が出土しているのが注目される。 (引原茂治)



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 宮津)



第2図 5号墳墓墳(南東から)

9 . 中山城跡第4次

所在地 舞鶴市中山・水間

調査期間 平成19年6月19日～8月10日

平成19年10月2日～12月21日

調査面積 700m²

はじめに この調査は、府道西神崎上東線の拡幅に伴い京都府中丹東土木事務所の依頼を受け実施した舞鶴市中山・水間に所在する中山城・中山近世墓跡についてのものである。

中山城跡は、『京都府遺跡地図』に周知の遺跡として登録された戦国期の山城である。

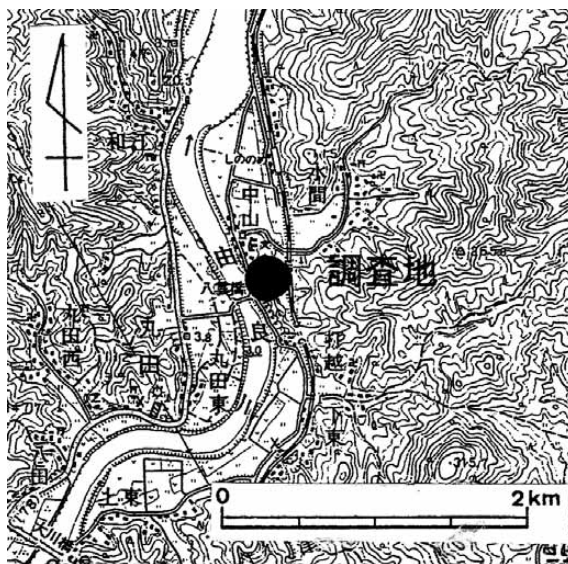
中山城の調査は、上記の事業により昭和57年度(第1次調査)と昭和58年度(第2次調査)に行われており、昨年度(第3次調査)の試掘調査を受け、今回の調査を実施した。

調査概要 今回の調査は、上記調査期間のように二時期に分け実施した。6月から8月にかけての期間では、本年度調査予定区の南半部で

近世墓を中心とした調査を、10月から12月にかけての期間では、北半部で中山城にかかわる空堀・土塁・曲輪を中心と

した調査をおこなった。中山近世墓については本誌の前号で紹介しているのでここでは後半期の調査について以下紹介する。

土塁・空堀 尾根筋を切断して造営した空堀と、空堀の間に掘り残して盛り土したと考えられる土塁とからなる一連の遺構である。空堀の掘削は地



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 舞鶴)



第2図調査地航空写真(西から)

山の岩盤を40～60°で削り出している。

曲輪 土塁の東及び南側に表土層を取り除いた後、空堀の掘削によって出た土や岩盤の礫で盛り土し、平坦地を造成している。

柵列 土塁・空堀の東では直径約50cmの柱掘形が曲輪の外郭にそって並び、南で一度西にクランクしてまた南にのびるが、調査地の南は後世の削平を受けており柱掘形を検出する事ができなかった。柵列になると考えられる。

古墓S X07 平面楕円状で高さ約40cmのマウンドをもつ。埋葬施設は平面規模1.5m×2.1mを測り、地表面から約1.0mで人骨(上下顎の歯骨)、鉄製品(釘)、古銭(唐銭、北宋銭、明銭)などが出土した。



第3図 中山城航空写真(東から)

(戸原和人)

10. 室橋遺跡第15次

所在地 京都府南丹市八木町室橋

調査期間 平成19年9月5日～平成20年2月28日

調査面積 1,830m²

はじめに 今回の調査は、府道亀岡園部線幹線道路改良事業に先立って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。室橋遺跡は、亀岡盆地北端の奥まった平野部に位置する集落遺跡で、南北約800m、東西約300mの範囲に広がる。これまで14次に亘り調査が行われ、古墳時代から奈良・平安時代～中世のかけての遺構・遺物が検出されている。

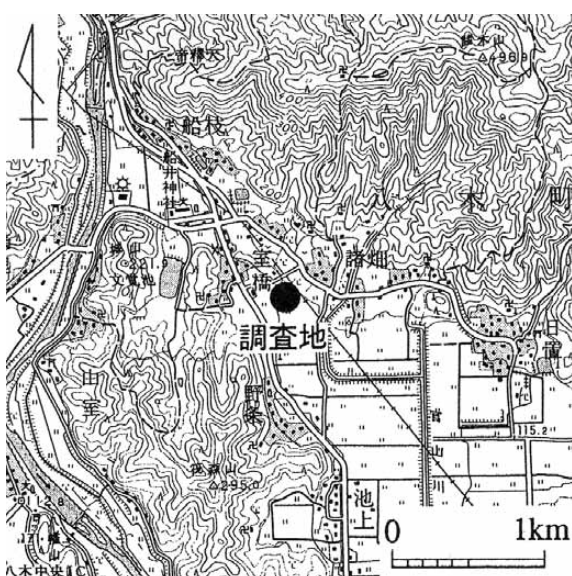
調査の概要 今回の調査は、道路予定地の南北約550mを対象とし合計10か所の調査区(トレンチ)を設け実施した。北から順に1～10の地区番号を付した。以下、地区毎に主な検出遺構を略述する。

第1地区は、遺跡の北限に当たり、今回、試掘調査を行った。その結果、第5次調査(18年度)・11次調査(19年度)で検出した弥生時代後期と推定される大規模な溝の北延長部を確認した。溝幅約4.8mを測り、さらに北西方向にのびる。

第2地区は、第5・11次調査地の北西側に接する。上記の大溝の西肩部を検出した。溝は上肩から急角度で落ち込んでおり、今回、深さ1.8mまで掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

第4地区では、調査区北西角で溝1条、南北方向の柵と思われる柱穴列を検出した。柱穴の1か所では、柱根が一部遺存していた。柵の所属時期は不明である。

第5地区では、掘立柱建物跡3棟(建物跡1～3)、柵などを検出した。建物跡は東側の第11次調査で一部確認されており、今回、規模が判明した。建物跡1は、梁行2間(5m)×桁行6間(13.4m)、建物跡2も同じく梁行2間(4.8m)×桁行6間(11.4m)を測る東西棟の建物で、両建物とも桁行の間に間仕切りの柱を設ける。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

調査で一部確認されており、今回、規模が判明した。建物跡1は、梁行2間(5m)×桁行6間(13.4m)、建物跡2も同じく梁行2間(4.8m)×桁行6間(11.4m)を測る東西棟の建物で、両建物とも桁行の間に間仕切りの柱を設ける。建物跡2は西側にさらに一間分のびる可能性がある。所属時期は、方形の柱掘形や須恵器片の出土から、奈良時代から平安時代前期に比定される。両建物は南北に近接し、規模も類似することから場所を移動して建て替えられたものと思われるが先後は不明である。

第6地区では、溝2条と柱穴状のピットを検出した。調査地の南東から北西方向にのびる溝

は、幅約3.5m、深さ約1.5mを測り、溝断面は「V」字形を呈する。第11次調査(第5地区)で確認された大溝の北延長部にあたる。調査地南西部では、大溝に合流する浅い溝を検出した。溝の合流付近から奈良時代頃と思われる須恵器杯片が出土した。

第7地区では、第5次調査(第6トレンチ)で確認された溝の延長部を検出した。幅約3.5m、深さ約1.4mで溝断面は逆台形状を呈し、北西から南東方向にのびる。溝上層から平安時代末～中世の遺物が出土した。

第8地区では、溝2条を検出した。調査地南側の溝は幅約2.5m、深さ約0.8mを測り、断面形は「V」字形を呈する。時期不明。

第10地区は、今回調査対象地の最南部にあたる。約50mに渡り南北方向に走る溝、竪穴式住居跡5基のほか多数のピット群を検出した。竪穴式住居跡は、一辺約4～6mを測る方形住居跡で、造り付けカマドを付設するものが見られる。住居跡の所属時期は、古墳時代中期頃と考えられる。

まとめ これまでの調査と同様、各地区から遺構が検出され、室橋遺跡が広範囲にわたることがあらためて確認された。今回、第5地区で奈良～平安時代に属する掘立柱建物跡3棟が検出された。これまでの調査結果と合わせ、この付近から東側の山際にかけて当時期の集落が広がることが想定される。また、今回の調査でも各地区から部分的であるが大規模な溝が検出された。これらの溝の詳しい開削時期や性格の解明については、今後の整理作業に待ちたい。



第2図 1・2区溝検出状況(南から)



第3図 第5地区掘立柱建物跡検出状況(北から)



第4図 第6地区溝検出状況(南から)

(辻本和美)

11. 余部遺跡第8次

所在地 京都府亀岡市余部町・大井町

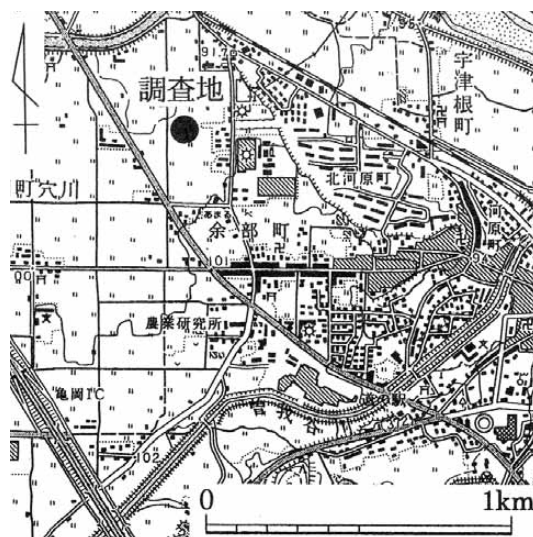
調査期間 平成19年9月13日～10月3日

調査面積 350m²

はじめに 今回の調査は、「宇津根新国道線広域幹線アクセス街路整備事業」に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。余部遺跡は大堰川右岸の河岸段丘に立地する複合遺跡である。これまで7次にわたって調査が行われており、平成9・10年度の発掘調査（第2次・第5次調査）では弥生時代の竪穴式住居跡および方形周溝墓群、古墳時代中～後期の竪穴式住居跡が確認された。

調査の概要 今回の調査地は、過去の調査結果により集落の外側に広がる水田域にあたと想定されていた。調査にあたっては、7ヶ所のトレンチを設定して試掘調査を行った。1トレンチは第5次調査区の西側に設定したトレンチで、中央西よりで中世の流路を確認した。ベースは褐色～灰色の砂礫層である。2トレンチでは床土の下層で河岸段丘を構成していると考えられる硬く締まった暗褐色砂礫層が確認された。3～6トレンチの基本層序は上から耕作土、床土、黄褐色～淡灰褐色シルト層、灰色砂礫層で、4トレンチの断ち割りにおいて表土下1.5mで湧水層に達した。灰色砂礫層は遺物を含んでおらず、調査地一帯に広がっていることから犬飼川の氾濫によってもたらされたものと考えられる。3トレンチおよび6トレンチでは黄褐色～淡灰褐色シルト層上面で近世から現代の耕作溝を数条確認した。ほぼ正方位をとる。3トレンチ西端の断ち割りにおいて黄褐色～淡灰褐色シルト層からわずかに遺物が出土したが時期は不明である。

まとめ 今回の調査では、近世以降の耕作溝が検出されたのみで顕著な遺構・遺物は見られなかった。遺物には弥生時代および中近世の土器や陶磁器等があるが、そのほとんどが河川の氾濫や耕作に伴うものである。調査地一帯は、段丘上に立地する集落の中心とは約3mの比高差がある。おそらく河岸段丘の裾付近に広がる犬飼川の氾濫原であり土地利用がしにくかったため中世にはいつてからようやく耕作地として開発され始めたのではないかと考えられる。
(松尾史子)



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 亀岡)

12. 長岡京跡右京第910次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

所在地 長岡京市友岡西畑、下海印寺伊賀寺

調査期間 平成19年7月26日～平成20年1月30日

調査面積 1,200m²

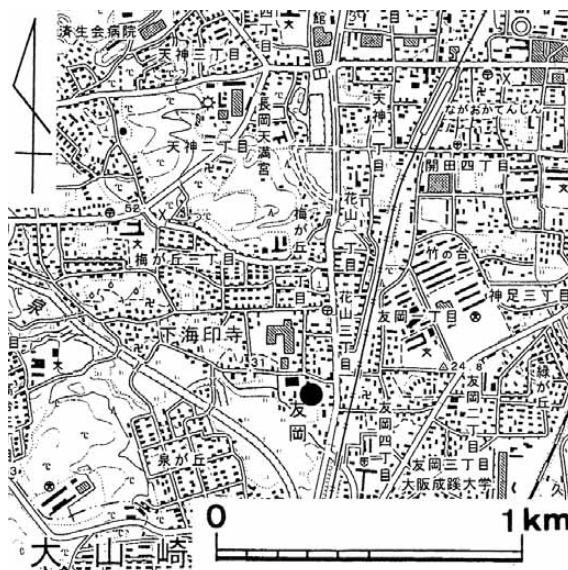
はじめに この調査は、府道石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に係わる事前調査として、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査対象地は長岡京の条坊復元によると、右京八条三坊九町にあたり、七条大路南側に位置する。また、旧石器時代～中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。調査地西側の現N T T西日本建物建設に伴い、昭和56年度(右京第70次調査)に実施された調査では旧石器～近世に至る遺物が出土し、古墳時代後期の竪穴式住居跡、長岡京期の可能性がある溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出されている。また、北側で行なわれた本道路事業に伴う調査では、平安時代の建物跡や中世を中心とした井戸や溝、多くの柱穴が検出されている。

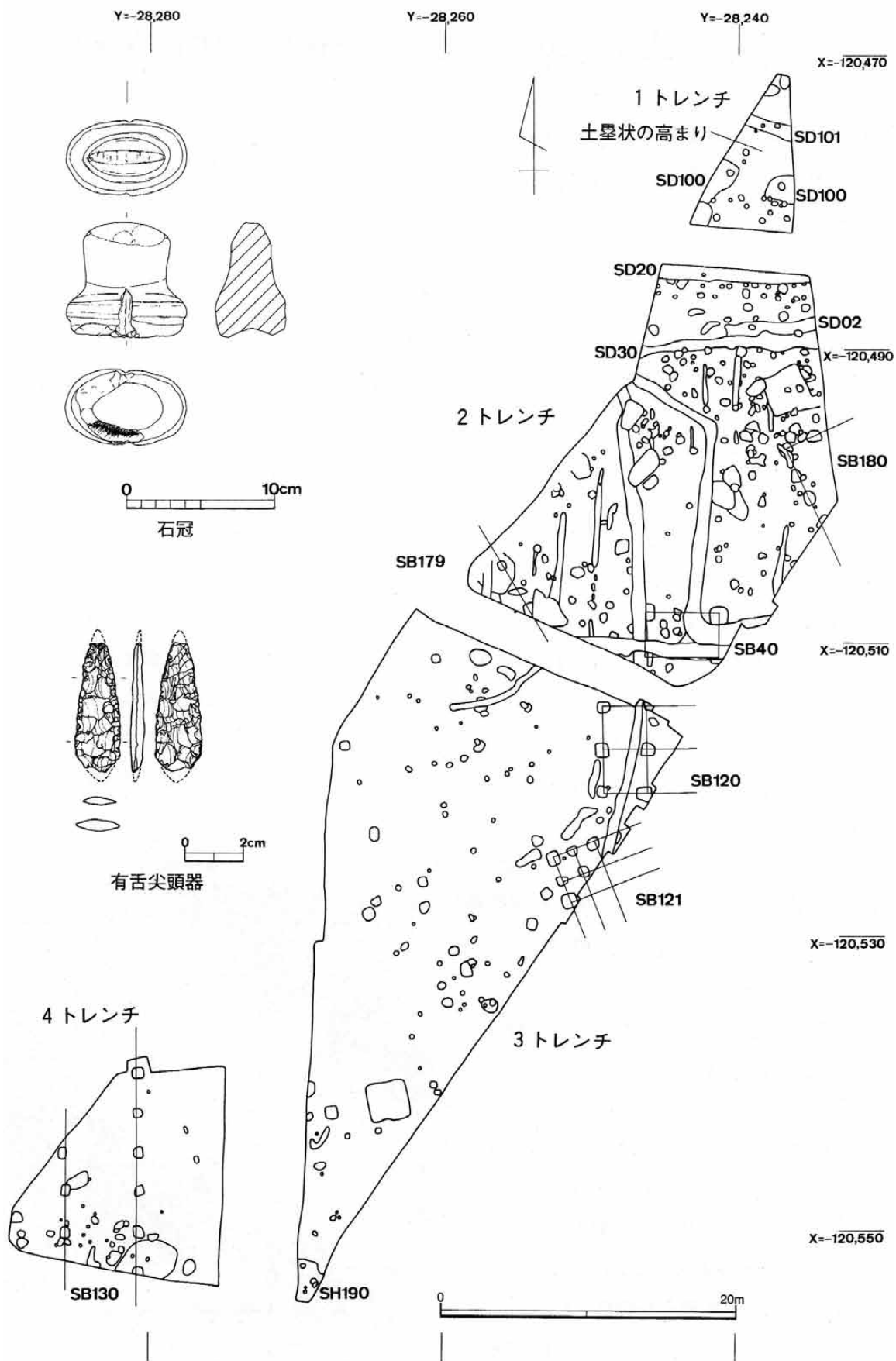
調査概要 調査は4か所のトレンチ(1～4トレンチ)を設定し実施した。検出した遺構としては、1トレンチでは、東西方向に延びる幅3mの土塁状の高まりと、南側と北側にこれに平行して延びる溝がある。2～4トレンチでは、奈良時代～中世にかけての多くの柱穴とともに平安時代の溝3条、土坑3基、正方位に主軸をとる長岡京期の建物跡3棟、時期は不明であるが、主軸が正方位に対して傾く掘立柱建物跡3棟と鍛冶炉2基を検出した。これらの建物跡の大半は、調査外に延びており規模は不明である。また、調査地南側の4トレンチでは、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基、3トレンチで縄文時代後期の竪穴式住居跡1基も検出した。この地域は、長岡京期の遺構は希薄であったが、今回、掘立柱建物跡を検出したことにより、今後、遺構は増加していくものと考えられる。

まとめ 遺物包含層中からは、旧石器時代の有舌尖頭器や縄文時代晩期の石冠も出土した。有舌尖頭器は、この地に早くから人が住んでいたことを示す資料である。また、石冠は近畿地方での出土例は少なく、中部地方を中心として出土するもので、地域間交流があったものと考えられる。長岡京期では土馬が出土しており、土馬によるマツリも明らかになった。

(増田孝彦)



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 調査地平面図

千束 5 号墳出土の銅鏡

千束古墳群は、京丹後市峰山町の北東側、網野町との境付近の尾根上に位置します。

南東側に隣接する尾根には、弥生時代末期の大型方形墳丘墓である国指定史跡赤坂今井墳墓があります。

今年度、この古墳群の中の 5 号墳、6 号墳の 2 基の古墳を調査しましたが、5 号墳から銅鏡が出土しました。5 号墳では、鏡のほかに、翡翠および碧玉製の勾玉や管玉、白玉、ガラス小玉なども出土しています。このような遺物構成から、5 号墳が造られたのは、古墳時代中期の 5 世紀前半頃と考えられます。



千束 5 号墳出土銅鏡

出土した鏡は、直径10.5cmの小振りな銅鏡です。鏡の背面には、周囲に、外から内側に向かって傾斜する無文の縁部(斜縁)が巡っています。その内側には、鋸の歯のような文様(鋸歯文)や二本線引きの波形文様(複線波文)、櫛の歯のような文様(櫛歯文)が巡っています。さらに内側には図像が表される文様帯が巡り、中心には、鏡の把手となる紐をつけるための、鈕と呼ばれる横穴のあいた半球形の盛上りがあります。

文様帯は、乳と呼ばれる小さな丸い突起 4 個によって 4 区に区画されています。鏡の中心の鈕を挟んで対向する 2 つの区画には、神と侍者とみられる 2 体並列の図像が、それぞれ表されています。ほかの 2 区画には、龍と虎とみられる獣像が表されています。このように 2 組の神像と 2 体の獣像を表した鏡が「四神二獣鏡」です。

神像や獣像を表した鏡は中国に起源を持ちますが、この鏡では、図像が省略されたりデフォルメされて、わかりにくくなっています。この鏡は、中国の鏡を真似て日本で製作された鏡と考えられます。中国製の鏡に倣って日本で作られた鏡ということで、「仿製鏡」と呼びます。

以上のようなことから、この鏡は「仿製斜縁四神二獣鏡」ということになります。丹後地域では様々な銅鏡が出土していますが、このような文様の鏡はこれまで出土していません。

(引原茂治)

長岡京跡・友岡遺跡出土の石冠

長岡京市友岡遺跡から出土したこの珍妙な形の石製品、頭にかぶる冠帽に似ていることで石冠とよばれる。しかし冠帽とは無関係であろう。岐阜県出身の啓蒙官僚学者であった神田孝平が、明治21年、飛騨地方に特徴的に出土することや、当地の人々によって石冠と呼び習わされていると紹介したことで、この名称が定着してきたとされる。

石冠の製作には、自然の円礫を用い、把手のような奇妙な形の上半部と、多くは楕円形となった下半部を一石で削りだし、全体をツルツルになるまで磨く。把手のような形には、男根形・斧頭形・球形・のし餅形などがあり、下半部は底面を凹ませたものが多く、周囲にマジカルな線刻を施しているものもある。砂岩・凝灰岩などが主な石材となる。

本例は、石斧に似た斧頭形の上半部で、下半部の全周に線刻が施され、さらにその線刻を一部断って紡錘形の凹みが穿たれている。上下に斧と凹みといった両性具有が表現されているようにもみえる。全体を磨くことに執着し、かつ大切にされたことは、滑らかに凹む底面に生じた欠けを丁寧に再研磨していることでわかる。一部が欠けたからといって、廃棄の対象とはならなかったようだ。

関西地方では20例ほどが知られるが、京都府ではわずか2例にすぎない。多く出土する時期と地域は、縄文時代後期・晩期の東日本である。とりわけ晩期で、北陸地方から飛騨・美濃地方を経て東海地方にまたがる帯状に濃密な分布がみられる。

あたかも列島東西の文化がここで対峙するかのようであり方は、一説として、晩期における東日本の縄文社会が、西の縄文人を強く意識した緊張感が生み出した現象ではないかといわれる。

縄文時代晩期は、一万年以上も続いた縄文時代の最後の時期で、東北部で繁栄を極めた亀ヶ岡文化にみられる土器・漆器などの工芸品的円熟とともに、現代のわれわれには用途不明ながら、気の遠くなるような手間をかけた呪術的
石製品(石冠の他、独鈷石・御物石器・石棒など)が数多く生み出された時期である。文化・技術が円熟を極めると同時に、晩期は気候・環境悪化(寒冷化や食糧難など)が進み、まもなく西から稲、金属器などの弥生文化の流入が始まっていく。この石冠は、迫りくる厳しい状況と新たな文化の胎動に、呪術で自らの存在意義を示そうとする人々の祈りが結晶したものと
いえよう。(黒坪一樹)



石冠(高さ7.8cm、幅8.2cm、重さ305g)

普及啓発事業

当センターの主な業務は、大きく分けて二つです。一つは遺跡の発掘調査とその記録、もう一つは、調査で明らかになった事柄を広く府民の皆様にお知らせし、埋蔵文化財保護について考えていただく普及啓発業務です。

普及啓発業務には、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会などの開催、埋蔵文化財情報誌の刊行などがあります。調査第1課が主にこの業務にあたっています。今年度は、例年実施してきた上記事業に加えて、出前授業、体験発掘、発掘現場・事務所訪問など、新たな取り組みを計画し、年間を通じて実施してきました。本号では、今年度下半期(10月～2月)に実施した事業の概要を紹介します。

埋蔵文化財セミナー

年に3回、府内各所で開催しています。本年度最後のセミナーは、第109回埋蔵文化財セミナーです。「都城と瓦」- 古代宮都の調査と瓦 - を主題として、2月24日(日)に、京都市生涯学習総合センター(京都アスニー)で開催しました。

内容

(1)「恭仁宮の構造 - 大極殿院の調査を中心として - 」

京都府教育庁指導部文化財保護課主任 奈良康正

(2)「長岡京跡南西部 - 近年の調査成果から - 」

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第1課長 長谷川 達

(3)「平安宮の饗宴施設 - 京都市 豊楽院の調査 - 」

(財)京都市埋蔵文化財研究所 調査研究技師 西森正晃氏

現地説明会

発掘調査現場で、調査成果の説明をする催しです。

10月27日(土) 長岡京市の長岡京跡右京第901次・伊賀寺遺跡、長岡京跡右京第910次・友岡遺跡で現地説明会を開催しました。伊賀寺遺跡では、弥生時代の竪穴式住居跡・流路跡を、友岡遺跡では、古代の掘立柱建物跡や縄文時代の石冠などを合計72名の方々に見学していただきました。

11月10日(土) 京丹後市弥栄町の谷奥古墳群で現地説明会を開催しました。谷奥古墳群は、



友岡遺跡現地説明会の様子

丘陵上に営まれた14基の前期古墳であることがわかりました。8号墳でみつかった長大な割竹形木棺を中心として、117名の方に現場を見学していただきました。

11月23日(金) 京丹後市峰山町の千束古墳群で現地説明会を開催しました。古墳時代中期の古墳2基を調査しました。104名の方に、現地とあわせて、青銅鏡や玉類などの副葬品を見学していただきました。

1月27日(日) 京丹後市網野町の俵野廃寺で現地説明会を開催しました。俵野廃寺は、丹後地域唯一の飛鳥時代の寺跡です。瓦が多量に集積する地点がみつき、70名の方に見学していただきました。

1月27日(日) 京丹後市久美浜町の茶臼ヶ岳古墳群で現地説明会を開催しました。古墳時代前期の方墳3基、壺棺や破碎された土器などを56名の方に見学していただきました。



谷奥古墳群現地説明会の様子



千束古墳群現地説明会の様子

出前授業

学校や各種事業所に訪問し、授業を実施する取り組みです。出土遺物や参考資料を持って、授業にでかけます。あらかじめ当方で用意した遺物を教材として授業をしますが、事前に打ち合わせをして、ご希望の時代の遺物をお持ちすることもあります。

11月10日(土)

府立り溪少年自然の家が主催した「家族ふれあい体験」事業で、土器作りをしました。6月に製作した土器を野焼きしました。府内在住の9家族24人に参加していただきました。

11月22日(木)

京都府立亀岡高等学校で、日本文化コース生徒を対象に、亀岡市篠窯跡群穴窯模型復原製作の製作指導をしました。

11月22日(木)

和束町立和束中学校で、縄文～古墳時代の歴史を考古資料を用いて社会科の授業をしました。1年生2クラス38名を対象に実施しました。



家族ふれあい体験での土器作り

発掘現場・事務所訪問

発掘調査現場の見学や発掘体験、発掘調査事務所で出土遺物の整理作業の様子を見学・体験していただく取り組みです。

10月11日(木) 京都府立亀岡高等学校の日本文化コース生徒36名と教諭2名が、校外授業として当センター施設を見学しました。出土した遺物を整理したり、図面として仕上げていく作業を熱心に見入っていました。



亀岡高校で窯跡模型製作について検討

10月30日(火) 埼玉県開智中学校3年生6名が、地域を設定するフィールドワークとしての実践的授業として、当センターを訪問してくれました。報告書や図録、遺物などを教材として京都の古墳を中心に、古墳の成り立ちや変遷、歴史的意義などについて学習しました。



和束町立和束中学校での学習の様子

11月12～14日(月～水) 亀岡市立高田中学校の2年生3名が、亀岡市蔵垣内遺跡・馬路事務所で、発掘体験、整理作業体験をしました。

11月13～15日(火～木) 亀岡市立大成中学校の2年生3名が、亀岡市蔵垣内遺跡・馬路事務所で、発掘体験、整理作業体験をしました。

12月14日(金) 八幡市立橋本小学校5年生約100名が、木津川河床遺跡の発掘現場を見学しました。地層の堆積する様子、地層に含まれる遺物の様子などを熱心に見学していました。

1月24日(木)京丹後市立海部小学校6年生11名が、京丹後市茶臼山古墳群の見学をしました。

(田代 弘)



埼玉県開智中学校3年生の学習風景



職場研修の様子

府内遺跡紹介

111. 境野1号墳

境野1号墳は、乙訓郡大山崎町字下植野小字境野にあります。

平成17年、共同墓地の南で1本の円筒埴輪がたったままの状態で見つかりました。

元の位置を留めた埴輪の発見により、この地点に古墳が存在することが確実になり、古墳の大きさや規模、構造などを探る目的で計画的調査が行われるようになりました。

その結果、乙訓地域南部における古墳研究を大きく進展させる内容の古墳であることがわかりました。これまでの調査でわかったことを、紹介します。

境野1号墳について

古墳の平面形は、前方後円墳で、墳丘の全長が約60mを測る大きな古墳です。

墳丘の斜面は、2段の階段状に築かれ(段築)、前方部の東側のみ3段に成形されています。墳丘の構築は、地形を削り出して下段部分を整え、その上に土を盛って築造されます。

また、その外観を装飾する装置として、墳丘の各段の平坦面には埴輪列が、上段墳丘の斜面部分には葺石が備わります。埴輪は円筒埴輪がめぐっていることがわかりました。

中心部付近の崖面を観察したところ、白色の粘土の広がりが確認され、この古墳を造るきっかけとなった人物を埋葬した施設(内部主体)は、粘土を用いた埋葬施設であることがわかりました。埋葬施設は、後円部の墳頂が後の時代に削られ、詳細はわかりません。北側の後円部墳丘を覆っていた土の中から腕輪を模した石製品などが出土しました。

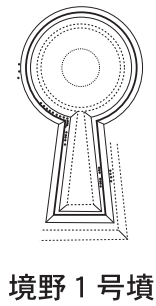
また、東側くびれ部に近い調査区からは、寄棟屋根の家形埴輪が出土し、石製品(車輪石・石釧)や太身の管玉、鉄刀の先などが出土しました。古墳が築かれた時期は、埴輪や腕輪形石製品から、古墳時代前期後半(およそ4世紀後半)と考えられます。

境野1号墳の評価

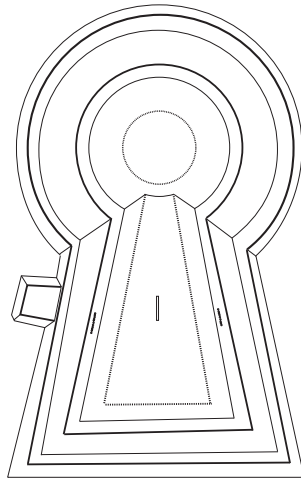
京都盆地の西部、桂川右岸(旧乙訓郡を中心とした地域)では、古墳時代前期には向日丘陵の頂に王の墓が数世代にわたり営まれ、中期(5世紀)に入りヤマト王権の地域支配の再編に伴って、乙訓南部地域の平地に巨大な前方後円墳の恵解山古墳が出現すると考えられていました。

境野1号墳の発見により、乙訓南部においても古い時期の首長墓が存在することがわかり、古墳研究に一石を投じる重要な成果が得られたものとみてよいでしょう。

(伊賀高弘)



境野1号墳



恵解山古墳

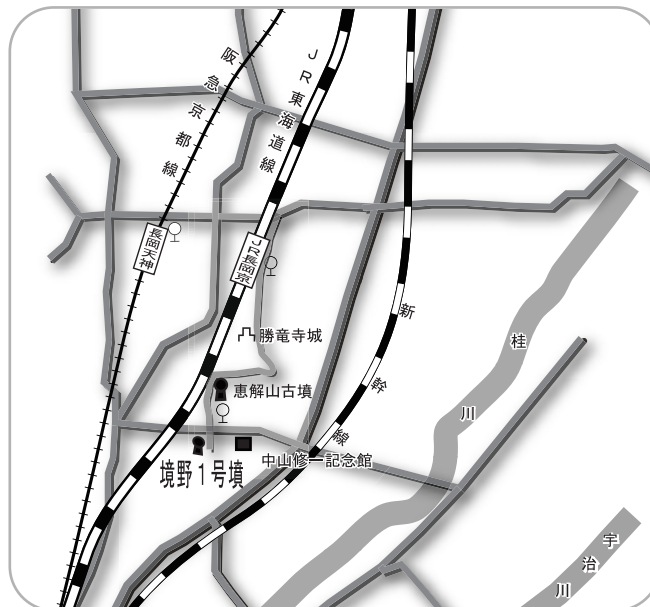


第1図 境野古墳と恵解山古墳



第2図 境野1号墳の現状

境野1号墳の場所



現地への行き方

J R 東海道線(京都線)「長岡京」駅、または阪急京都線「長岡天神」駅下車、阪急バス71・72系統に乗車の上、「久貝」バス停で降りて、徒歩で南西に約300m。

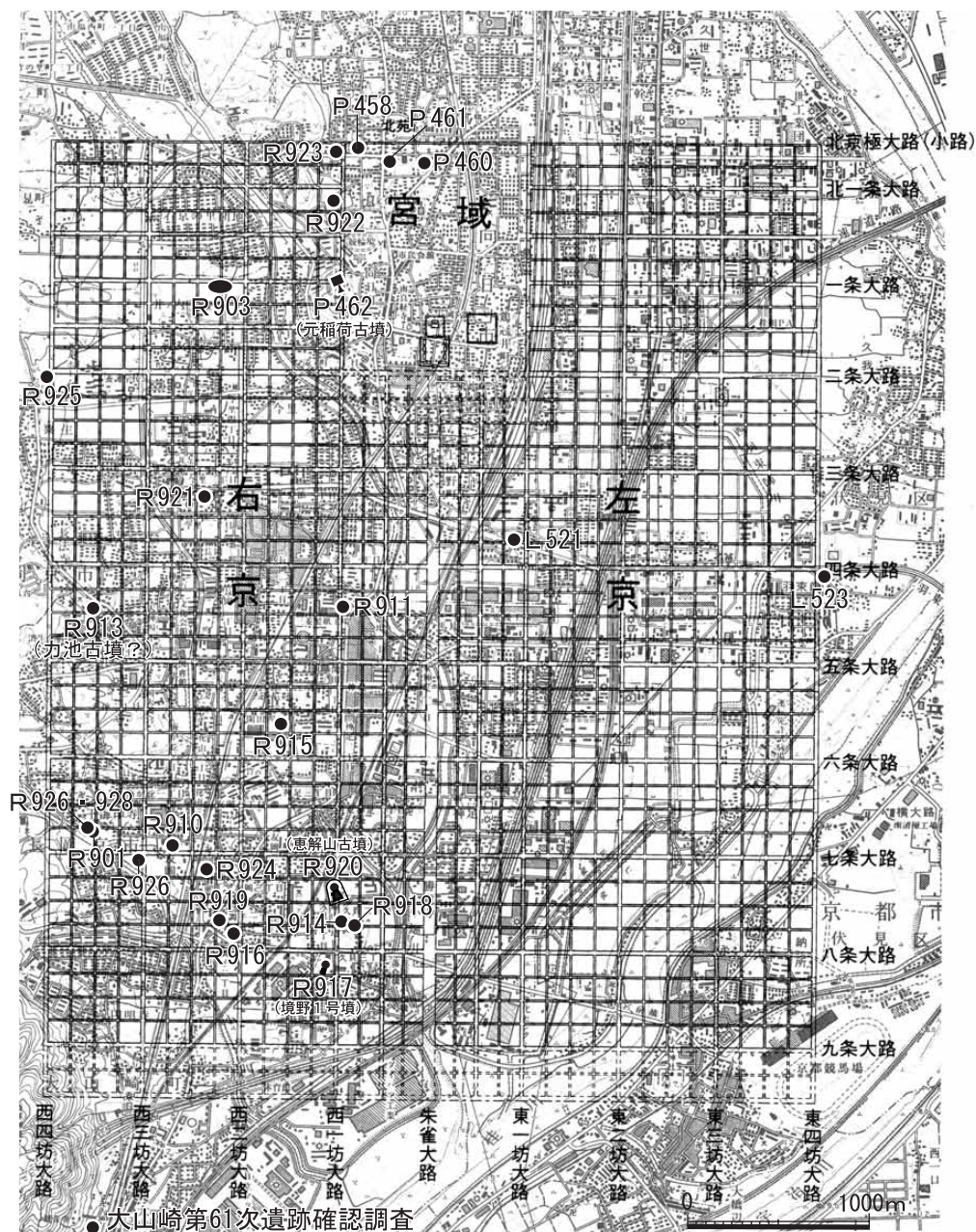
また、脚に自信のある方はJ R 長岡京駅から南に約1.5km。

道中に乙訓地域最大規模の恵解山古墳や、山崎の合戦で明智光秀が本陣とした勝竜寺城があります。古墳は、サントリー京都ビール工場内に現状保存されています。

長岡京跡調査だより・101

毎月1回、長岡京域で調査に携わっている機関が集まって長岡京連絡協議会を実施している。平成19年9月から12月までの例会では、29件について報告があった。

以下、報告地点を地図上に示し、顕著な成果が得られたものについて、その概要を紹介する。



第1図 調査位置図 (S=1/40,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復元図に加筆)
調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域

湯屋の発見で脚光を浴びた宝菩提院廃寺の周辺で3件の調査が実施された。宮第458次では、掘立柱建物跡と溝、土器類が多く投げ込まれた廃棄土坑などが検出され、右京第923次の大型掘立柱穴と溝の検出と合わせ、寺院の構造を復元できる要素が加わった。

左京域

第521次で、東一坊大路の西側溝と、宅地内で掘立柱建物跡や柵が検出された。

右京域

京域の北西部の第903次では、長岡京の一条大路南側溝とこれに交差する坊路の側溝、さらに、道路に面して築地(築垣)を巡らせた宅地内で、整然と配された主殿、脇殿、倉庫などの掘立柱建物跡が検出された。さらに、下層では弥生時代前期、及び縄文時代晩期の集落が良好に残されていることが判明した。とくに、滋賀里 a ~ b 式の竪穴式住居跡や多数の土器棺墓、多量の遺物が捨てられていた川跡の発見は重要な成果である。

一方、長岡京の南西部における第910・916・919・924～928次では、長岡京に先行する時期の資料が得られた。鞆岡廃寺の周辺では、飛鳥時代の竪穴式住居跡(924次)や正方位に配置された大型の掘立柱建物跡群(910次)などが検出された。また、古墳時代後期のかまどをもつ竪穴式住居跡(926・927次)、縄文時代の石冠や有茎尖頭器(910次)、焼土坑(916次)、竪穴式住居跡(927次)などが見ついている。

第911次では、弥生中期の埋葬施設を伴う方形周溝墓と土器棺墓・竪穴式住居跡、古墳時代後期の竪穴式住居跡、五条条間小路の南側溝が検出された。

第913次では、横穴式石室の残骸(石室石材の掘形)がみつき、組合式石棺材や須恵器から6世紀中葉の築造であることがわかった。

乙訓寺の南隣接地で実施された第921次では、炉壁や炭・灰が捨てられた土坑が確認され同寺院の生産関連遺構と考えられる。

右京第923次では大規模な溝が検出され、応仁の乱の時に「寺戸山」に置かれた陣に関わる堀の可能性が指摘された。

乙訓地域最大規模の前方後円墳である恵解山古墳について、第8次調査が実施された(第920次)。前方部墳丘の東側の埴輪列・葺石を初めて確認するとともに、墳丘裾東側に造出は存在しないことがわかった。4世紀後半に築造された前方後円墳の境野1号墳では、新たに後円部墳丘裾で埴輪列と葺石を確認し、後円部が3段築成であることがわかった(第917次)。

京域外

大山崎町第61次遺跡確認調査では、史跡大山崎瓦窯跡の北側隣接地で工房の広がりを探る調査が実施され、工人の生活を示す土器類が廃棄された土坑が検出された。

(伊賀高弘)

センターの動向

(平成19年10月～平成20年1月)

1. できごと

- 10. 1 時塚遺跡(亀岡市)発掘調査終了(4.23～)
- 3 余部遺跡(亀岡市)発掘調査終了(9.3～)
- 9 馬場南遺跡(木津川市)発掘調査開始
- 11 亀岡高等学校日本文化コース生徒、当センター施設見学(39名)
- 12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会(於：滋賀県)
長谷川達調査第1課長、森正調査第2係長、伊野近富次席総括調査員、森島康雄主任調査員、筒井崇史調査員、松尾史子調査員出席
- 15 蔵垣内遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 17 (財)世界人権問題研究センター人権大学講座(於：京都市)肥後弘幸調査第2課長参加
俵野廃寺(京丹後市)発掘調査開始
- 18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：新潟県)水谷壽克調査第1課主幹、杉江昌乃
総務係長、今村正寿主任出席(～19日)
- 24 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 27 長岡京跡右京第901次調査・伊賀寺遺跡及び長岡京跡右京第910次調査(長岡京市)・友岡
遺跡現地説明会(参加者72名)
- 29 茶臼ヶ岳古墳群(京丹後市)発掘調査開始
- 30 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
埼玉県開智中学校関西フィールドワークグループ生徒来訪(6名)
- 31 職員健康診断実施
- 11. 5 センター本部臨時職員職場研修
- 6 教育庁職員行政・人権問題研修及び教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)長谷川
達調査第1課長、肥後調査第2課長、小山雅人総括調査員、小池寛調査第1係長、引原
茂治・増田孝彦・中川和哉主任調査員、石尾政信・岡崎研一専門調査員、伊賀高弘主査
調査員、高野陽子調査員、杉江昌乃総務係長、宮下真也主事参加
- 7 (財)世界人権問題研究センター人権大学講座(於：京都市)森正調査第2係長参加
- 9 増田富士雄理事鹿背山瓦窯跡視察
安全パトロール実施(千束古墳群ほか)
亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市)長谷川達調査第1課長出席
- 10 京都府立るり溪少年自然の家「家族ふれあい体験」土器野焼き指導(於：南丹市)

- 田代弘資料係長、筒井崇史調査員
谷奥古墳群現地説明会(参加者117名)
- 11 神在月古代文化シンポジウム(於：島根県)肥後弘幸調査第2課長講演
 - 12 京都人権啓発行政連絡協議会主催人権研修会(於：京都市)安田正人事務局次長参加
亀岡市高田中学校職場研修(於：蔵垣内遺跡～14日)
 - 13 亀岡市大成中学校職場研修(於：蔵垣内遺跡～15日)
 - 14 教育庁職員行政・人権問題研修及び教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)水谷壽克調査第1課主幹、田中彰、松井忠春、竹原一彦主任調査員、竹井治雄専門調査員、柴曉彦主査調査員、松尾史子調査員、今村正寿主任、鍋田幸世主事参加
応急手当講習(普通救命講習 於：京都市)長谷川達調査第1課長受講
 - 15 文化庁清野孝之文化財調査官鹿背山瓦窯跡視察
 - 16 恭仁宮跡調査専門委員会(於：木津川市)小山雅人総括調査員出席
 - 19 長岡京跡右京第926次調査(長岡京市)発掘調査開始
 - 21 (財)世界人権問題研究センター人権大学講座(於：京都市)安田正人事務局次長、水谷壽克調査第1課主幹、小池寛調査第1係長参加
教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)石井清司課長補佐、伊野近富次席総括調査員、田代弘資料係長参加
 - 22 教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)杉江昌乃総務係長、森正調査第2係長参加
和束中学校体験学習授業(於：和束町)長谷川達調査第1課長、伊賀高弘主査調査員
亀岡高等学校日本文化コース須恵器窯模型製作指導(於：亀岡市)田代弘資料係長
 - 23 千束古墳群(京丹後市)現地説明会(参加者104名)
 - 27 篠窯業生産遺跡群保存活用に係る連絡調整会議(於：亀岡市)石井清司課長補佐出席
 - 28 長岡京連絡協議会(於：当センター)
戸田遺跡(福知山市)発掘調査開始
 - 29 谷奥古墳群(京丹後市)発掘調査終了(6.18～)
 - 30 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：大阪府枚方市)杉江昌乃総務係長出席
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪府堺市)田代弘資料係長出席
- 12.6 千束古墳群発掘調査終了(8.21～)
- 11 史跡網野銚子山古墳発掘調査委員会(於：京丹後市)肥後調査第2課長出席
 - 12 乙訓管内人権に関する職場研修会(於：向日市)安田正人事務局次長、辻本和美次席総括調査員、田中彰・森島康雄主任調査員、黒坪一樹専門調査員、筒井崇史調査員参加
 - 13 安全パトロール実施(馬場南遺跡ほか)
 - 14 乙訓管内人権に関する研修会(於：向日市)肥後弘幸調査第2課長、戸原和人主任調査員

- 伊賀高弘主査調査員、石崎善久・村田和弘調査員参加
- 19 長岡京連絡協議会(於：当センター)
 - 20 第81回役員会・理事会(於：京都市)上田正昭理事長、中西和之常務理事、井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・増田富士雄・高橋誠一・上原真人・小池久各理事出席
 - 21 中山城跡(舞鶴市)発掘調査終了(6.19~)
 - 1 . 10 埋蔵文化財担当職員等講習会(於：姫路市)肥後弘幸調査第2課長、岩松保主任調査員参加(~11日)
 - 18 職員生活習慣改善指導(於：当センター)
 - 22 京都府建築工業協同組合歴史文化講演会(於：京都市)石井清司課長補佐講演
 - 23 府新規採用フォロー講習 (於：京都市)宮下真也主事参加(~24日)
 - 24 労働安全衛生研修会(於：京都市)肥後弘幸調査第2課長参加
 - 25 公益法人制度改革説明会(於：京都市)安田正人事務局次長、杉江昌乃総務係長出席
 - 26 香芝市二上山博物館シンポジウム「邪馬台国時代のタニハ・タジマとヤマト」石崎善久・高野陽子調査員講演
 - 27 俵野廃寺現地説明会(参加者70名)
茶臼ヶ岳古墳群現地説明会(参加者56名)
 - 29 人権問題特別研修(於：京都市)中川和哉主任調査員参加
 - 30 茶臼ヶ岳古墳群発掘調査終了(10.29~)

(長谷川 達)

編集後記

情報105号をお届けします。

本号では、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡のまとめのほか、本年度実施事業の略報、千束古墳の銅鏡・友岡遺跡の石冠についての報告などを掲載しました。

「遺跡でたどる京都の歴史」は今回お休みしましたが、次回、弥生時代をテーマとして掲載する予定です。

(編集担当 田代 弘)

京都府埋蔵文化財情報 第105号

平成20年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER